

日本語文型の構文論

川 口 義 一

I 文型の構文論的レベル

日本語教育に使われる文型は、日本語の構文の基本的な単位をとりだしたものである⁴⁾。例えば、ふたつの動作が平行して行われることを表す～ナガラの文型(後述の逆接のナガラと区別するために「ナガラ¹文型」と呼ぶ)は、

(1) メモヲトリナガラ聞キ取り試験ヲ受ケタノデヨクデキタ。

という文の構文上の一要素となっている。一般的に、文は複数のこのような要素の集合体であって、例文(1)にもナガラ¹とノデの文型がはいっているが、これらの文型同士は、その構文論上の性格に相違がある。例えば、ノデの直前の動詞は例文(1)のように過去形にしても、下記例文(2)のように現在形にしても、文法的には問題がない。

(2) メモヲトリナガラ聞キ取り試験ヲ受ケルノデイツモヨクデキル。

しかし、ナガラ¹文型の直前の動詞は過去形も現在形としての終止形もとれず、必ず音便形でない連用形でなければならない。また、ナガラ¹文型の直前の動詞は、否定形になれない点でもノデ文型と異っている。一方、逆接を表すナガラ²文型は、前接の動詞が否定の形式をとっていてもかまわない。

(3) スベテヲ聞キ取ルコトハデキナイナガラ、デキルダケメモヲトツタ。

しかし、ナガラ²も前接の動詞を過去形にすることができない点でノデと性格を異にする。

以上のように、ナガラ¹・ナガラ²・ノデの各文型は、それにふくまれる動詞がとりうる形式がちがっている。つまり、それぞれの文型内にふくむことのできる情報の内容がちがってくるわけである。

この事情を動詞以外の文要素を使って検討してみよう。まず、例文(1)に学生タチハという提題成分をいれてみるよう。

(1) 学生タチハ、メモヲトリナガラ聞き取り試験ヲウケタノデ、ヨクデキタ。

この提題成分は、従属文メモヲトル・試験ヲウケルの両方に主格の情報を与えながら、主文のヨクデキタにも主格の情報を与えており、その作用が文末まで及んでいることがわかる。すなわち、ナガラ¹文型も提題成分を各々の文型内に含んでおくことはできないのである。ナガラ²文型もまた同様であることは、例文(3)'でわかるであろう。

(3)' 学生タチハ、スペテヲ聞き取ルコトハデキナイナガラ、デキルダケメモヲトッタ。

一方、(1)に主格成分学生タチガをいれると、

(1)'' 学生タチガメモヲトリナガラ聞き取り試験ヲウケタノデ、ヨクデキタ。

となり、学生タチはメモヲトルと試験ヲウケタの主格であると解釈できても、ヨクデキタの主格とは解釈できない。このように、ナガラ¹文型では、主格成分を文型内に含んでおくことができないが、ノデ文型ではそれが可能である。ナガラ²文型の例文(3)には、そのまま学生タチガが入れられないので、次のような文にしてみよう。

(4) 学生タチガスペテヲ聞き取ルコトガデキナイナガラ、デキルダケメモヲトッタコトハホメラレテヨイ。

すると、主格成分については、ナガラ²文型もナガラ¹文型と同様に含みこんでおく力がないことがわかる。

次に、助動詞について考えてみよう。様態の助動詞ソウダは、ナガラ¹文型にはおさまらず、ナガラ²・ノデの各文型内におさまらうる。

(5) 簡単ニ聞き取レソウデアリナガラ、ナカナカ正確ニ聞き取レナイ。

(6) 簡単ニ聞き取レソウナノデ、ディクションヲシテミタ。

しかし、推量の助動詞マイは、上記みっつのどの文型内にもおさまらない。もし、理由を表す従属文中でマイを使いたければ、次のようにしなければならない。

(7) 簡単ニハ聞キトレルマイカラ、何回カ聞カセテミルツモリダ。

以上のように、ナガラ¹・ナガラ²・ノデの各文型は、それぞれの文型内に含むことのできる情報内容が動詞の形式(否定形をとれるか、過去形をとれるか)についてだけでなく、名詞句や助動詞についても異なっている。

更に、文型同士の関係を見てみよう。例文(1)では、ナガラ¹文型がノデ文型の一部になっていることがわかる。一方、ナガラ²文型はノデ文型の中におさまることはない。

(8) スベテヲ聞き取ルコトハデキナイナガラデキルダケメモヲトツタ
ノデ、聞き取り試験ガヨクデキタ。

例文(8)では、ナガラ²文型はノデ文型と同じ資格で並列的にヨクデキタに関係しているのであって、ナガラ¹文型のようにノデ文型内の一部にはなっていない。また、例文(9)のような文が文法的に可能であるところから見て、ナガラもノデもカラ文型の一部にはなりうる。

(9) スベテヲ聞き取ルコトハデキナイナガラデキルダケメモヲトツタ
ノデ、聞き取り試験ガヨクデキタノダカラ、今後モメモハトルベキダ
ロウ。

このように、いろいろな文型は、それぞれに含みうる文要素を異にしながら、お互いを含み含まれ、時には同等に並び立つという関係になっていることがわかる。言いかえれば、これらの文型は、構文論的にその属するレベルが異っており、そのレベルに許される文要素を含みながらより高次のレベルの文型内に取りこまれ、複雑な文型の組み合わせを形づくっている

のだと言えよう。

このような観点から日本語の構文を A から D までの四段階のレベルの組み合わせとして分析した研究には、一連の南不二男の論文²⁾がある。小論は、南論文の構文論が語学教育の見地から見ても多くの示唆を与えているという観点から、南論文の分類法にヒントを得て、日本語教育の初級段階で扱われている主要な文型をその構文論的特徴から分類しようという試みである。分析にあたっては、南論文でとりあげていない「述語文型」も取りあげることにする。ここで述語文型というのは、前記例文(5)・(6)・(7)の中のソウダ・マイのような文末表現を中心とした文型で、他にカモシレナイ・ニチガイナイ・ノダ・ヨウダ・ワケダなどがあげられる。これらは、一般に「断定表現」とか「推量表現」というような意味論的な名称で一まとめに論じられる広義の「助動詞群」であるが、その意味的類似性による分類とは別に、その中に含まれる文要素やそれ自身の他の文要素への承接などの構文論的な特徴により、異なった分類が可能であり、また語学教育の中で文型として扱うときには、他の文型との組み合わせの可能性を考える場合などに、その構文論的特徴を知っておく必要があるという考えから、改めて分析の対象としたものである。この述語文型と対照させるため、従属接続詞句を中心とした文型を「従属句文型」と呼ぶことにする。前述のナガラ^{1,2)}・ノデ・カラなどがこれである。従属句文型と述語文型以外の構文上の要素類(副詞・名詞と助詞の結合句など)は、「句成分」として、文型との関係からレベル分類をほどこしてみた。その際、南論文で言及の少なかった副詞の構文論的分類の可能性も検討してみた。先に、本論の分析の結果を図示すると、図 a のようになる³⁾。

図 a の A から D までの各レベルの文要素は、アルファベット順に構文論的レベルが高くなっていき、より低次に属する要素は、より高次の要素の一部となる。一方、より高次のレベルの要素は、基本的により低次レベルの要素の中にはおさまらない。これを従属句文型同士の関係で見ると、前述のナガラ¹⁾・ナガラ²⁾・ノデ・カラ相互の関係となる。述語文型同士の

	句成分	述語文型	従属句文型
A レベル	<ul style="list-style-type: none"> ◦格成分(主格を除く) ◦副詞(ユックリ, 速ク, キラキラト, 元気ニ/トテモ, ソウトウ/タツプリ, タンマリ/ダンドンニ, ニワカニなど) 		<ul style="list-style-type: none"> ◦ナガラ¹(平行断続) ◦ツツ ◦〈連用形重ね形〉 ◦一テ(連続・結果)
B レベル	<ul style="list-style-type: none"> ◦主格成分 ◦補充成分 ◦対照のハ ◦副詞(ゼンブ, スッドカ リ/タビタビ, トキド キ/スコシ, カナリ/ イタツテ, キワメテ/ アマリ, カラキシ, サ イアツパン/トウトイ, 完 全ニ/ホトンド, オオ カタ など) 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ベキダ・ベカ } ナイ・タ ラズ } 前接せ ◦ソウダ(様態) } ず ◦トコロデ・バカリダ } 一ナイ前接せず ◦ナケレバナラナイ } タ前接せず ◦ザルラエナイ } タ前接せず ◦ワケニハイカナイ } タ前接せず ◦Te モイイ/カマ ワナイ } タ前接せず ◦Te ハイケナイ/ ナラナイ } タ前接せず ◦Te ホシイ/モラ イタイ } タ前接せず ◦ホウガイイ ◦ツモリダ ◦ハズダ ◦ニチガイナイ ◦ミタイダ ◦ヨウダ ◦ラシイ ◦カモシレナイ 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ナガラ²(逆) ナイ・ 接) タ前接 ◦ト } せず ◦〈連用形中止法〉 ◦ナノデ/ズニ ◦ハシナイデ/セズ (ニ) ◦クハ/デハ ◦ナク(テ)/アラズ (ニ) ◦タリ ◦ウエニ・ホカニ ◦一テ(原因・理由・並 列) ◦ノデ ◦タメニ ◦ノニ ◦ニモカカワラズ
C レベル	<ul style="list-style-type: none"> ◦提題(ハ, ナラ, ダツ タラ, ダガ, ッテ, ト ナルト など) ◦副詞(ケツシテ, 別ニ 毛頭/モチロン, アイ ニク, サイワイ, メズ ラシク, ヤハリ/タブ ン, オンラク など) 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ノダ ◦モノダ ◦ワケダ ◦ソウダ(伝聞) ◦丁寧語 ◦ダロウ・デアロウ ◦マイ ◦ウ・ヨウ(意志・推量) 	<ul style="list-style-type: none"> ◦バラ ◦タラ ◦ナラ ◦カラ ◦ケレド(モ)・ケド (モ) ◦ガ ◦シ
D レベル	<ul style="list-style-type: none"> ◦感動詞・間投詞 ◦応答詞 ◦ある種の文間接続詞 (ダツテ, シカシ, トコ ロデ など) ◦よびかけの名詞句 	<ul style="list-style-type: none"> ◦△ナア/ヤ ◦△ガ・カア・カナア・カ シラ・△カイ ◦ゼ/ゾ ◦モン・モノ/ダイ/ワ ◦命令形/ウ・ヨウ(勧誘) ◦ナイフ/マセン(コト)フ /タラフ ◦コトダ/ナ ◦ッテバ ◦ヨ/ネ 	

(図 a)

関係で見ると、例文(10)・(11)のように B レベルの文型が C レベルの文型の一部になることはあるが、その逆は不可能であるということである。

(10) メモヲトラナケレバナラナイノダ。

(11) メモヲトツタハウガイイワケダ。

述語文型と従属句文型の関係から見ると、B レベルの従属句文型は B レベルの述語文型を、C レベルの従属句文型は B・C 両レベルの述語文型をその一部にすることができるが、B レベルの従属句文型内に C レベルの述語文型をいれるわけにはいかないということになる。例文(12)・(13)・(15)は文法的で、(14)は容認できない(*で表す)ゆえんである。

(12) メモヲトツテハイケナイノニ、……
 $\begin{array}{c} \text{B} \\ \text{---} \\ \text{B} \\ \text{---} \end{array}$

(13) メモヲトツテハイケナイケレド、……
 $\begin{array}{c} \text{B} \\ \text{---} \\ \text{C} \\ \text{---} \end{array}$

(14)* メモヲトツタソウダノニ、……
 $\begin{array}{c} \text{C} \\ \text{---} \\ \text{B} \\ \text{---} \end{array}$

(15) メモヲトツタソウダケレド、……
 $\begin{array}{c} \text{C} \\ \text{---} \\ \text{C} \\ \text{---} \end{array}$

また、D レベルの述語文型である終助詞句は、B・C レベルのどちらの述語文型もその文型内に含むことができ、同じレベルの従属句がないので、つねに文末に位置する文要素である。

句成分と文型との関係は、従属句文型と提題成分・主格成分との関係ですで見たとように、高次のレベル句成分は、その作用が低次のレベルの文型内におさまらない。述語文型との関係も同様である。例えば、

(16) キミ、メモハモットキレイニ書イタハウガイイヨ。

という文では、D レベルの「呼びかけ」成分キミは、同じレベルの述語文型ヨと呼応するが、C レベルの句成分メモハの作用が及ぶのは A レベルの書クと B レベルのタハウガイイまでであり、D レベルのヨには提題の作用は及んでいない。

同じレベルの異なる文型同士は、前述のノデとナガラ²のように並列になるか、次の例のように一方が他方に含まれる関係になる。

(17) 聞キトツタ単語ヲ忘レルト困ルノデメモヲトツタ。

(18) メモヲトラナケレバナラナイハズダ。
 $\begin{array}{c} \text{B} \\ \text{---} \\ \text{B} \\ \text{---} \end{array}$

BとCのレベルは、属する文型が多く、その中でまた第2次の分類ができるが、くわしくは、次節にゆずる。

II 各構文レベルの内容とその検討

図aのAからDまでの各レベルの文要素同士の関係は、概略前節で述べたようなものである。以下、各レベルごとにもう少し詳しくその構文上の特徴を検討してみよう。

(i) Aレベルの文要素

このレベルのナガラは、ナガラ¹の方である。〈連用形重ね形〉というの

(19) 辞書ヲヒキヒキ英語ノ新聞ヲ読ム。

という形である。また、一テ(連続・結果)というのは、例文(20)・(21)のようなものであって、例文(22)のような一テは、Bレベルに属するものである。

(20) 手ヲアゲテ質問ニ答エル。

(21) 机ニヒジヲツイテ先生ノ話ヲ聞イテイル。

(22) 知ラナイ単語が多クテワカリニクカッタ。

述語に対する主格名詞句は、このレベルに属さない。例えば、

(23) 弟ガテープヲ聞キナガラ発音練習ヲシテイル。

という文では、主格名詞句の弟ガは聞くに対してだけ主格なのではなく、ナガラを越えて練習シテイルにも主格となっている。また、

(24)* 弟ガテープヲ聞キナガラ姉ガ発音練習ヲシテイル。

という文は文法的でなく、主格名詞がナガラ¹文型内におさまらないことがわかる。このことは、ツツ・〈連用形重ね形〉・一テの各文型でも同様である。

副詞でこのレベルにおさまるものは、その作用が否定まで及ばないものである。例えば、

(25) ヌックリ発音シナイ。

(26) タツプリ練習シナイ。

では、ユックリとタツプリの作用はそれぞれ発音スル・練習スルの意味にのみ及んでおり、それ全体をナイが否定している。したがって、(25)・(26)はそれぞれ、〈早く発音スル〉・〈少シダケ練習スル〉の意味に解釈できる。また、

(27) *R ノ発音ハトテモムズカシクナイ。

(28) *ダンドンニワカッテコナイ。

は容認できない。以上のことから、これらの副詞は、構文上否定が現れる以前のレベルに属するものと考えられる。

最後に、このレベルでは、述語になりうるものが、動詞・形容詞・指定副(ダ・deal)の連用形だけであって、従属句文型の一部と同形式なので述語文型を別にたてる必要がない。

(ii) B レベルの文要素

B レベルは、述語文型と従属句文型において、図 a の点線の上部グループと下線グループで、構文論上の特徴がちがっている。まず、下部グループの文型は、ナイ・タ・ナカッタをすべて前接させることができる。一方、上部グループは、次のような構文論的特徴を持つものの集合である。

① ナイもタも前接しないもの：

*シナイベキダ・*シタソウダ(様態)⁵⁾

② タが前接するがナイが前接しないもの：シタトコロダ・*シナイトコロダ

③ ナイが前接するがタが前接しないもの：シナイワケニハイカナイ・*シタワケニハイカナイ、シナイナガラ・*シナカッタナガラ

また、上部グループの述語文型は下部グループの述語文型にふくまれるが、その逆は不可能である。

スルベキナノカモシレナイ・*スルカモシレナイベキダ、シナケレバイケナイラシイ・*スルラシケレバイケナイ

次に、句成分を見てみよう。主格名詞句がBレベルのものだということ

は、次の例文がどんな形で終わっても主格名詞句が B レベル従属句の外へ関係することができないことでわかる。

(29) 講師が来ナイノデ……

(30) 講師が来ナケレバ……

(31) 講師が来ナイニモカカワラズ……

補充成分というのは、主格・目的格・対格以外の名詞と格助詞の結合句であるが、これらも、主格成分同様レベルの従属句内におさまる。

(32) 授業料ハドルデ / 2 階デ払ワズ, 円デ / 3 階デ払ウベキダソウダ。

対照のハは、否定と共起する関係でこのレベルに属する。例文(3)の「聞キトルコトハデキナイナガラ」のハは対照のハである。提題のハは、C レベルに属するので、対比のハと構文上の役割がちがっている。例文(33)では、(3)と異なり、ハが提題成分として思ワナイまでかかっている。

(33) スベテヲ聞キトルコトハデキナイノデヤツテミヨウトモ思ワナイ。

副詞では、図 a にあげたようなものがこのレベルに属するが、すべての副詞の作用が否定に及んでいる点で、A レベルの副詞と異なる。例えば、ワカラナイという否定文にゼンプ・トキドキ・スコシ・キワメテ・サツパリ・モットモ・完全ニ・ホトンドなどの副詞をつけてみると、これらの副詞の作用はワカラナイ全体に及んでいることが了解される。

なお、従属句句型内の〈連用形中止法〉というのは、例文(34)のようなもので、〈連用形重ね形〉と異なり、主格成分を含むことができる。

(34) 教師ガ発音シ, 学生ガマネテ繰リ返ス。

また、一テ(原因・理由・並列)というのは、例文(22)のようなもの他、次のようなものを指す。

(35) 有気音ト無気音ノ区別ガアツテ, 発音ガムズカシイ。(理由)

(36) 有気音ト無気音ノ区別ガアツテ, 母音ノ数モ多イ。(並列)

(iii) C レベルの文要素

C レベルの述語句型は、もっぱら表現者の主体的な態度の表出にあずか

るものである。B レベルまでの述語文型には、表現者の主観的な判断にかかわるもの(ヨウダ・ハズダ・カモシレナイなど)もあるが、それはあくまでも素材の叙述を通して表現されるものであり、表現者の態度そのものではない。このことは、B レベルまでの述語文型からは名詞修飾句がつけられるが、C レベルの述語文型からはできないということからも明らかである。

(37) 宿題ヲヤラナカッタニチガイナイ学生

(38) 宿題ヲヤラナカッタラシイ学生

(39) ??宿題ヲヤラナカッタダロウ学生

(40) *宿題ヲヤラナカッタノデアル学生

(39)は翻訳文などに見かける表現であるが、日本語としては不自然である。B レベルの従属句文型で、ノデなどもデアロウ・ダロウを前接した形で現われることもあるにはあるが、推量のムードが構文上の早いレベルへ混入したものと見るべきかと思う。事実、否定と推量が一体となったマイでは、(25)のような名詞修飾句もノデへの前接もおこりえない。

敬語も表現者の態度を表す文要素であるが、尊敬語・謙譲語・美化語などがもつばら素材を通しての敬語であるのと違い、丁寧語はそのまま相手に対する表現者の態度の表出となる点が異なっている。その丁寧語をもつ述語文型はC レベルに属するものと思われる。それは、丁寧語を持つ述語を名詞修飾句にしようとする、いささか不自然(あるいは敬語過剰な)ひびきが生まれるからである。(41)と(42)を比較されたい。

(41) 会話講座ヲ持ッテイラッシャル先生方

(42) 会話講座ヲ持ッテイラッシャイマス先生方

C レベルの述語文型には、この丁寧語が前接するもの(図 a の点線下部グループ)としないもの(同上部グループ)がある。(43)から(46)までの例文によってこの事情確認されたい。

(43) *コノ字ハクメール文字デゴザイマスソウデス。

(44) *コノ字ハクメール文字デハアリマセンノデス。

(45) コノ字ハクメール文字デハアリマスマイ。

(46) コノ字ハクメール文字デゴザイマシヨウ。

従属句文型は、推量を表す述語文型を含むことができないグループとできるグループとで、それぞれ点線の上・下に分けられる。

句成分では、提題のハがこのレベルに属する。助詞ハの他にも提題を表すことのできる句成分は、すべてこのレベルに属すると考えられる。

(47) 和独辞典ナラ M 出版ノモノガイイ。

(49) 和独辞典デスガ, M 出版ノモノガヨロシイカト存ジマス。

C レベルの副詞は、B レベルのものと同様否定にまでその作用が及ぶ。しかし、B レベルの述語文型の否定が判断の根拠の有無やそういう判断を生み出す状況の有無に関するものであったのに対し、C レベルの述語文型ノダ・モノダ・ワケダなどの否定形は、推論のし方・論理の運び方そのものに対する否定である⁵⁾。C レベルの副詞には、この種の否定にまでその作用が及ぶものがある。たとえば、

(50) ケッシテサツパリワカラナカッタカラ試験ヲ投ゲタワケデハナイ。

という文では、B レベルの副詞サツパリがワカラナイに作用しているのに対し、同じ否定の副詞でも C レベルのケッシテは、〈試験を投げたのはわからなかったからである〉という推論のし方そのものの否定にかかわっているのである。モチロン・ヤハリなどの副詞も同様の作用をもつ副詞である。この他に、推量表現と呼応するタブンやオソラクなども、ダロウ・マイなどが C レベルに属するため、同じレベルにあるものと考えられる。

(iv) D レベルの文要素

D レベルの要素は、表現者の心理的過程を非分析的に表出する要素群と見てよい。このレベルの述語文型は、終助詞を中心とするものであり、これで一文が完成するため、従属文型は存在しない。図 a の終助詞の分類は、次のようなものである。

点線上部の始めの 4 列のものは、それによって表される表現者の気持ち

に対して誰か別の人の反応を期待しないという点で、次の4列のものと意味的に性格を異にする。例えば、

・(51) 捲舌音ハムズカシイナア。

という文は、表現者が〈捲舌音の発音が容易でないこと〉を納得した気持ちを表すもので、この感想に対して誰かが答えてくれたりコメントをつけてくれたりすることを期待していない。同様なことが例文(52)のふたつの終助詞についても言える。

・(52) コレガ「捲舌音」カイ・コリヤ、ムズカシイヤ。

同じカイでも、例文(53)のものは疑問を表しており、誰かに答えを求めるといった積極的な姿勢を表している。

(53) 「捲舌音」テソソナニムズカシイノカイ。

下の4列の終助詞群は、疑問のほか依頼・命令・勧誘・確認など、コミュニケーション上より積極的な働きかけの作用を持つものである。上4列の終助詞で下4列のものと同じような用法を持ちうるものは、△印をつけてある。なお、点線下に置いたヨとネは、その他の終助詞のほとんどに後接できるという構文上の特徴を持つ。

Dレベルの句成分は、主に表現者とその表現の受け手とが一定のコミュニケーション関係に入るためのことばである。「一定の関係」とは、「自分に対する注目の喚起」〈例文(54)〉・「特定のものを要求する訴え」〈例文(55)〉・「話題の転換」〈例文(56)〉・「社会的人間関係の確認」〈例文(56)〉などである。

(54) 先生，質問ガアリマス。

(55) インク消シ! インク消シ!

(56) シカシ，A教授ハヨク本ヲ出シマスナ。

・(57) ドウモアリガトウ。

以上の文要素は、表現者が受け手とのコミュニケーションに入るきっかけとなるものであるから、当然ながら文頭に置かれるか、もしくはそれだけで一文をなす。一方、Dレベルの述語文型をなす終助詞は、文末に置かれ、

表現者が伝達内容に関してどのような気持ちをいだき、あるいは受け手にどのようにしてほしいかを示すことによって文を完結させるのである。したがって、伝達内容が既知のものであれば、Dレベルの文要素のみで文が成り立つ。

(58) 先生、ネッ！(前ニ陳情シタ期末テスト廃止ノ件ヲ想起シ、善処サレタシ)

なお、(58)を()内の内容を持つものとして理解させるためには、話しかける際の語調や表情などに特別な工夫を するのが 効果的である。「構文上の」というわくをはずして、コミュニケーション機能全体として考えれば、このような音声的特徴や非言語要素も、Dレベルの要素と考えられる。

(v) 構文論的レベルによる文構造のモデル

以上、図 a 全体の解説をしてきたが、図 a は要素のレベル別の表であるため、実際に言語としての文が書かれ、話されるときに構造を明確にしてはいない。図 a の内容を、「表記され、発話される一文の構造」という形で図示すると図 b のようになる。

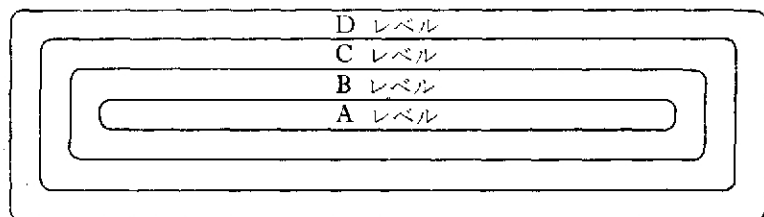


図 b

例文(58)をこのモデルにあてはめてみると、図 c のようになる。

例文(58)は、Dレベルの要素だけで文が成りたっているが、句成分「先生！」と述語文型「ネ!!」の間にA-Cレベルの文型・文成分によってうめられるべき情報内容(例えば、要請に応じて試験をしないということ)が包みこまれている。図 c でこのような事情が視覚的にも明示できる。次に、例文(1)をこのモデルにあてはめてみると、図 d のようになる。

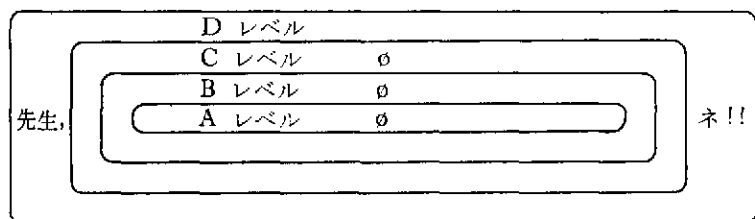


図 c

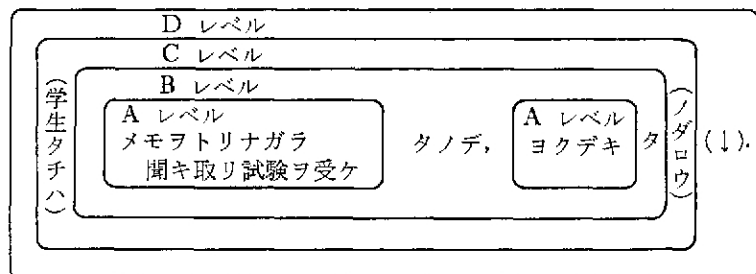


図 d

ここでは、C レベルの要素と D レベルの要素が登場しない。右側の文が、ヨクデキタノダロウというように推定の形でおわれれば、ノダロウの部分が C レベルの述語文型として書きこまれるし、学生たちハという提題を加えれば、これも C レベルの句成分として書きこまれる。D レベルの述語文型は、終助詞という形では現れないが、この文が句点をもって完結する文であれば、発話の際には下降調の語調が表れるはずであり、このような語調は、図 d に D レベルの要素として矢印で示したように書きこめるであろう。このように図 a に分類された構文論上の各レベルの要素が、実際に表記され、発話される場合は、D レベルの句成分をコミュニケーション出発の合図とし、C レベルの句成分-B レベルの句成分-A レベルの句成分-A レベルの文型-B レベルの文型-C レベルの文型という順で並び、D レベルの述語文型によって、線上に並んだ構文要素列の最終点、およびひとつのコミュニケーション単位の終結を示すのである。高次のレベルの要素が

低次のレベルのものを包みこんでいく日本語の文構造の特徴は、図bのようなモデルで視覚化されうと思う。

IV 構文レベル分析と語学教育

図aの表と図bのモデルによって示された日本語の構文要素の分析が語学教育の観点から見て示唆に富むというのは、どのような点についてであろうか。筆者は、おおむね次の二点についてであろうと考える。その第一点は、すなわち、日本語の構文は低次レベルの文型と句成分を高次レベルの文型と句成分がはさみこみ、包みこむ形をなしているので、図bで表される構文モデルが頭に描かれるような教授法が自然な日本語文の生成を可能にする、という点である。例えば、多くの日本語教科書の第一課の単元である「～ハ～デス。」という文型がCレベルのものであることが理解されれば、

(59) 父ハ日本人デ、会社員デ、今パリニ住ンデイマス。

という文の読点のあとに、「父ハ」を繰り返さなくてもよいことも理解しやすくなる。また、それによって、先の単元に進んだとき、Bレベルの従属句文型内の主格成分(～ガ)とハ提題(～ハ)の機能の違いも理解しやすくなる。「～ハ～デス。」の導入の段階で、この文型の構文的レベルを理解させるためには、その前の段階で、オリエンテーションとして日本語の構造を簡単に紹介しておくのが便利である。あるいは、導入の際、図eのようなモデルを使って、単語が文に変換されときの構文レベルの決定の過程

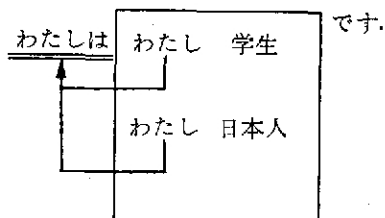


図 e

を示すことにしてもよい。具体的な導入方法については、なお研究の余地があらう。

第二の点は、単元のグループ分けと提出順についての点である。いくつかの文型を一つの同じ意味カテゴリーの単元にまとめて提出する方法では、文型間の構文的特徴の差異が学習できない。例えば、「原因・理由の表現」を学習する単元で、ノデもカラと同時に教えてしまうと、学生が

(60) 雨ガフルデショウノデカサヲ持ッテイッテクダサイ。

という誤用をおこなうおそれが生ずる。デショウがノデより高次の要素で、同じレベルのカラを使わないと理由の文型内におさまらないという構文論的特徴がわかっていないためである。また、「否定と副詞」という単元でアマリとケッシテを同時にあつかうことも文構造を正しく理解させるうえで危険である。たとえば、

(61) アマリ行キタクナイ。

(62) ケッシテ行キタクナイ。

の例文では、ふたつの副詞はともに、行キタイの否定と呼応しており、否定の強さが強いかわいかなの差しかないが、

(61)' アマリ行キタクナイノデハナイ。

(62)' ケッシテ行キタクナイノデハナイ。

では事情が異なる。すなわち、アマリはCレベルの文型ノデハナイの内側にとりこまれ、行キタクナイにしか作用を及ぼさないのに対し、ケッシテはCレベルの副詞であるため、行キタクナイにもノデハナイにも作用するのである。したがって、(61)'は、〈アマリ行キタクナイと解釈するのは正しくない。むしろ、全く行きたくない〉と解釈できるのみであるが、(62)'は、〈ケッシテ行キタクナイと解釈するのは正しくない。少シハ行キタイと考えてよい〉という解釈と、〈行キタクナイという断定は全く正しくない。他の事情のため行キタイと明言できないのだ〉という解釈の両方が成り立つ。この区別は、構文論的にふたつの副詞が異なるレベルに属するため、否定性の強弱という意味的差異だけでは説明がつかない。したがっ

て、アマリとケッシテの構文論的特徴を学習しない学生は、(61)と(62)と(61)'の解釈は正しくできても、(62)'の解釈が完全でなくなるおそれがある。

このように、意味特徴としては同じ部分を共有する文型や句成分でも異なる構文レベルに属することがある、ということをお教えるためには、低次のレベルに属する文要素ほど、早い単元で与えておくという提出順序を設定することが必要である。ノデとカラならば、ノデをカラより早く提出した方がよいということである。まず、Bレベルの文型・句成分をノデと組み合わせさせて文型練習をし、次にCレベルの述語文型を一通り導入してから、カラのようなCレベル従属文型を教えるのがよい。また、カラとノデを同じ単元で扱うより、構文的レベルが等しく意味的に対立するケレドとカラ、ノデとノニをそれぞれ一括して扱った方がよい。

否定の副詞については、アマリは最初に否定がでてくるとき、つまり動詞・形容詞・コピュラの否定形とともに導入し、ケッシテはノダ・ワケダなどの否定形とともに、アマリよりずっと後に導入し、それぞれ「アマリ～ナイ。」・「ケッシテ～ノデハナイ。」というような文型として教えるべきである。ケッシテの否定の作用がCレベル以下の文型に及ぶことも、ケッシテ導入の時点で初めて紹介するのがよいと思う。

以上、本論の文構造分析が語学教育に示唆を与える点を検討してきたが、どちらの点も構文論的特徴による「カテゴリー認知」の有利な面を指摘したものである。人間がものを学習するときには、新しい情報が既知のどのカテゴリー下に入るかを認知する必要がある。語学教育の場合、「新しい情報」とは、新出の単語や文型であるが、それをひとつのカテゴリーの下におさめようとするとき、まず意味的なカテゴリー認知が必要である。例えば、イヌは「動物」（あるいは“+animate”）というカテゴリーに、ヤマは「非動物」（あるいは“-animate”）というカテゴリーにそれぞれ含まれると正しく認知されることは、どちらが動詞イルの主格成分になりうるか、という問題の解決に是非とも必要だからである。しかし、ノデと

カテ、および否定の副詞について検討したとおり、構文的レベルの差をひとつのカテゴリー—認知の規準にしておくこともあわせて必要である。日本語教育用の教材は、この意味的カテゴリーと構文的カテゴリーを学生に自然に習得させるよう構成されているのが望ましいと思われる。このような教材の導入・文型練習・文法解説などが具体的にどのような構成のものになるかは、なお時間をかけて検討しなければならない問題である。本論の理論的枠組の妥当性の検証とともに、筆者の今後の教育実践上の課題になるであろう。

(本文注)

1) 「文型」とは、語が文をなすときの配置形式をいい、一般的には、「主語・述語・目的語などを『—ガ—ヲ—スル』のような形で示す構造上の文型と、文末形式で示される「表現意図上の文型」(『国語学研究事典』p. 178「文型」の頁)のふたつの側面からとらえられ、研究されてきている。本論では、「文型」を「表現意図上の文型」としてあつかうが、その際、文末形式でしめされる表現意図だけでなく、従属接続詞句によってまとめられる表現意図もあわせてあつかうことにする。

2) <参考文献>の項参照。

3) 本論で分析の対象としたものは、従属文を形成する構文的要素までである。いわゆる文間接続詞(シカシ・ソシテ・サラニなど)は、構文論的な規則とは別種類の「論旨の展開」とでもいふべき結合法則によって文相互をむすびつけており、その分類には別の検討を必要とすると考えられるため本論の検討の対象外とした。また、「副詞」には、形容詞・形容動詞の連用形(メズラシク・完全ニなど)や量的概念を表わす名詞(ゼンブなど)の連用修飾の用法もふくめてかんがえることとする。

4) 様態のソウダには、オモシロクナサソウダのようにナイが前接する場合もある。ただし、ナイの形にならずナサの形になっているところに特徴がある。この形式上の意味の差については、なお考えてみたい。前接の否定が動詞の場合は、シナ(サ)ソウダよりは、シソウデ(ニ)ナイの方が普通であろう。

5) 「否定」そのものにも意味的にレベル差があるように思われる。<参考文献>の寺村 1980 参照。

<参考文献> (著者・編者名の五十音順)

国際交流基金 1980 『文法 II 助動詞を中心として』 (<教師用日本語教育ハンドブック ④>・国際交流基金)

国立国語研究所 1978 『日本語の文法(上)』 (<日本語教育指導参考書 4>・大蔵省印刷局)

1981 『日本語の文法(下)』 (<日本語教育指導参考書 5>・大蔵省印刷局)

寺村秀夫 1980 「ムードの形成と否定」(『林 栄一教授還暦記念論文集』・くろしお出版)

- 文化庁 1972 『日本語と日本語教育——文法編——』（〈国語シリーズ 別冊 2〉・文化庁）
- 南不二男 1961 「文論の分析についての一つの試み」（《国語学》43）
- 1964_a 「複文」（『講座現代語』6・明治書院）
- 1964_b 「述語文の構造」（《国語研究》No. 18・国学院大学）
- 1967 「文の意味についての二、三のおぼえがき」（《国語研究》No. 24・国学院大学）
- 1974 『現代日本語の構造』（大修館書店）